
憑依者ユーノの物語

妄想人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

憑依者ユーノの物語

【Nコード】

N2841Z

【作者名】

妄想人

【あらすじ】

この物語はもしユーノが憑依者だったらどうなるのか？そんな物語。

ーある決まった物語に俺が介入する時、その物語は変わりだす。

／／／／／／／／／／／／／／

はつきり言って作者の妄想そして文才ないです。それでもよければどうぞ。

目次（前書き）

よければお願いします。

目次

俺は何故か何もない白い空間にいる。前、下、右、左、永遠に続いている。訳がわからないから考えようとしたら突然

「やっと目覚めましたね」 っと目の前に女が現れた！

「あんたが、俺をここに？」

いきなり現れた事はとりあえずスルーして今一番の疑問を聞いたなら「その通りです！」

やたら自信ありがちに答えて来た。

「……………変質者？」

「違いますよ！？何故いきなりそうなるんですか！」

「こんな意味わかんねえ空間連れ込んで位だし、それを自信ありがちに言われるとな。」

軽くふざけた感じで、バカかという目で目の前にいる女に言った。た。

「ああー！絶対今かなり、怪しい人だと思いましたね！」 なーんて言ってきやがた。それ以外なにあんだよ全く。

「じゃあ、あんたは何者なんだよ？」

事と次第によるならシバくぞっと俺は心の中で毒をはいていた。

「聞いて驚きなさい！！私は、～神～です！」

……俺はその答えを聞いて頭を抱えだした。

「フッフッフ、驚いているようですね？」

確かに驚いている。その理由は

「誰か助けて下さい！目の前に頭を相当ケガをしている女性がいま
す！！！」

彼女の頭はどうなっているかについて。

「なっ！こっち真面目に答えているのに、何て事言うんですか！」

「やかましい！完全に痛い人発言にしか聞こえないんだよ！」

「だから、本当なんですよ！」

「もういいから、病院行け！」

数十分その話は続いた。

「俺が死んだ？」

からかうのをやめ真面目に移ったと思ったらいきなり死亡宣告をされた。

「はい、そうなんですけどこちらの不注意であなたを間違えて死な
せてしまったんです。」

申し訳なさそうに言ってきた。

「ふーん、そうなんだ。」

俺は興味がないように答えた。

「あの、怒らないんですか？」

「人はいつかは死ぬ。それが遅かれ早かれ変わらないさ。」

「変わってますね。」

「ほっとけ。」

「話が変わるのですが、あなたにはもう一度人生やり直してもらいます。」

「何故に？」

「間違いで死んでしまった人にはそうなるようになっていくんです。」

それはどうかとおもうぞ？

そして俺はある事にきずいたそれは

「俺の体ないんだけど？」

そう俺は事故で死んでしまい原型を留めていない体になってしまっている。

「大丈夫です。あなたが好きなキャラになることができます。それにチート能力も貰えますよ！」

……月並みの展開です。そして俺の中で答えも決まってきた。

「リリカルなのはのユーノで、能力はいろんなキャラと修行しながら貰っていく。」

「えっ何ですか！普通カッコイイ主人公でしょう！それに何で修行なんかやるんですか、チート能力貰って無双すればいいじゃないですか！？」

質問多い神だなく理由話すしかないか。

「まず何故ユーノかというと」
「というと？」

興味深々と聞いてきて答えた。

「ニートになれるからだ!!」

「はあ?!」

「ストーリーは知らんが将来本の整理だけでやっていける。」

「格好悪!てか原作知らないんですか!!」

「ああ、全く知らん!」

「そんなので大丈夫ですか？」

そんな装備で大丈夫かのごとく聞いてくる。

「問題ないぜ。」

「はあ、わかりました。で、修行の理由は? (どうせくだらない理由な気がしますけどね)」

「その人達の覚悟、誇りを知り俺がそれを背負っていくができるか、だ。」

急に目の前の男の雰囲気が変わった。さっきまでのふざけた要素がまるで嘘かのようにまた男は語りだした。

「ただ能力を貰うだけじゃ意味がない。それを使う覚悟がなければ、その力に吞まれ破滅を生むだけだ」

まだ男は語る。

「なら俺はその使う意味をその人達の元で、修行をし誇りを持って受け継いでいきたいんだ。」

私は啞然としてしまった。理由がスゴいとかそう言う問題じゃない。その存在感のすごさに思わず魅入ってしまった。

「なくんてな。どうだった俺の演技凄かったろ？本当はただキャラと話しがら貰えれいいだけさ。」

また雰囲気に戻った。本当に訳のわからない変わった人ですね。

「んじゃ、体頂戴。後、修行の人達は――でよろしく。」

「チートの塊ですね。まあいいですけどね。ではすぐに修行の場所にワープさせるので出たい時は言ってお下さい。」

「了解。さて行きますか！」

どうせなら楽しい物語にしていきたいな。まっ作者次第か？

ー開始直後にメタ発言は止めて下さいー

おっと注意されちゃったぜ。まあ、俺も頑張ってくとしますか！

目次（後書き）

反省会

「全くこんな調子で大丈夫なのか。続けていけるか不安だぜ。」
「本当に申し訳ない。」

「まあ、それは置いて次回タイトルは【やっと始まった物語】だ。よろしく。」

「流すな！そして勝手に決めるな！

「またいつか。」

「聞けよボケ！

やっと始まった物語（前書き）

色々とカオスです。

やっと始まった物語

おっす俺、憑依者ユーノ。前振り通りにワクワクしてるところだ。
何故かというと

「遺跡の中で見事に罠に掛かり、後ろから追って来るゴーレムから
必死に逃げてるからだ!!」

「おいユーノ! 何いきなり大声出したよ! びっくりするだろうが
!」

開始早々にハードな展開になっている状況です。

さて何故俺がここいるのか、説明しよう!! ……スイマセン少し
ンション上がってます。

ゴホンでは、話します。俺はご察してる通りに修行が終わり、そし
て今はスクライア一族のみんなと一緒に各地を転々としながら遺跡
を回っています。

えっ、修行の内容と出会いはどんな感じだったんですか?

その質問はまた後ほどお願いします。

そして今になる訳なのですがどうか

「元は言えば、コウキが勝手に罠を発動したせいだろうが!」

「うっ…」

「しかもわざわざ【押してね♪】何て、書いてある怪しさ全開のボ
タンを押すバカが何処にいる!」

「だってやけに明るかったから押せば、美女が出て来てウハウハと思いい、つまり何が言いたいのかと言うと、俺【という名の変態】はここにいる！！と示したかった。」

「スケエエエエエエエエエイス！」

「グハッ……。何しやがんだユーノ！今俺、最高に格好いいセリフ言ったのに、全力で殴ることねえだろ！！」

「全てにおいて台無しだボケ！というかハ○オに謝れ、ついでにフアンにも謝っとけ！今お前は間違いなく敵に回したからな！！」

何てくだらないやり取りをしている所です。※注意 一応まだ走っています。

後、この人の紹介がまだでした。

名前はコウキ・スクライア。年齢は二十歳以上で、身長は170位あり、そんなに顔も悪くないのだが、ご覧の通り残念な人です。

ついでに俺の現在の年齢は九才という設定です。やろうと思えば、

年齢と身長など、いとも簡単に

「ユーノ！そろそろ何とかしないとヤバイぞ！」

……コウキ少しは空気読め。というか

「お前がなんとかしろよ。人に押し付けんなこの他力本願。」

「だって、魔法使えない状態になってんだからしょうがないじゃん！」

何故かという罨が発動したと同時に魔法を封じる罨まで発動したため、現在使えないのである。

本当めんどくさく二重の意味でな。

「本当頼む！俺もう限界なんだ！」

「気持ち悪いこと言うなゴラァ！貴様を生け贄にすんぞ！」

「すまん！でも、本当に体力の限界なんだよー。」

全くだい大人がだらしなない。まあしょうがないからそろそろ助けるか。

俺は立ち止まりそして俺の後ろにいるコウキもそれを見守っている。

ドッドッドッド！と段々、ニメートル近くあるゴーレムが迫って来た。そして俺は腰に付けてあった‘あるもの’を取り出した。

やがてゴーレムが目の前まで来てそのデカイ拳を振るった。

「ユーノ！」

心配すんなよコウキ、余裕だからさ。

俺はその拳を後ろに紙一重でよけると同時に俺の手に握っていた‘あるもの’を当てそして響いた。

キイイイイイイイン…

俺はその‘音角’を自分の額までもついき呟いた。

「歌舞鬼…」

その直後にユーノの周りには花風吹が舞い散り、そして左手を開き前に出し、同じく右手を開き顔の横まで持っていた瞬間に

「~~~~ン、ハッ！」

その花風吹が散った。その先にいたのは、左右非対称の角をはやし、緑色と赤色をモチーフにした“鬼”を連想させる戦士がいた。

そして後にいるコウキが俺に言った。

「なんで、そんなに身長まで伸びんだよ。しかも俺より高い！」

……こいつから清めてやろうかマジで？

「さて、無視して始めますか？ L e t , s R o c k 【派手に行くぜ】
！」

ゴーレムが今度は右ストレートをかまして来たので横に避けると同時に一気に懐に入り

「ウオッリゃ！」

左アッパーを喰らわせ、そのまま一回転をし右カカと落としを決め、相手を怯ませた。

まだ俺の攻撃は終わらない、今度は腰に付けてあった【音撃棒・烈翠】を両手に構えた。

「ハアアアアア！」

声を上げると烈翠の先端に付いている鬼石に翡翠色の炎が灯しび、そして烈翠をゴーレムに向けて振ると同時に炎が相手に向かって放たれた。

「!!」

ゴーレムは危険を感じ、両手でその攻撃を防いだ。だが、その両手はボロボロでいつ壊れてもおかしくない。

そして歌舞鬼はゴーレムに接近し

「ハッ！セイ！」

その両手を破壊した。

「こいつは、オマケだ！」

勢いよく飛び上がり、ドロップキックをお見舞いした。

ゴーレムは倒れてしまいが、まだ動いてる上に腕まで再生しつつあるようだ。

「これで、終わりにする！」

俺は装備帯から、三つの火の玉が追い合っている絵柄の【音撃鼓・舞桜】をゴーレムの胸に押し付けた。舞桜が回転しながら大きく展開した。

烈翠を高く構える。そして、先端部の鬼石が煌めいた。

「音撃打・業火絢爛の型！！」

音撃打の型の名を叫び、清めの音を叩き込む！

「ハアアアアア！」ダンダンダンダンとなんでも叩き込むその音は、聞くもの全てを魅力する。まさに【清めの音】だ。そして

「ハアアアアア！ゼエヤ！！」

その美しき演奏を終わりを迎えゴーレムが爆発を起こし舞い散った。

俺は両手の烈翠をクルクル回しながら腰に戻し変身をといた。

「なかなか楽しかったぜ？」

ニヒルに笑い終わりを告げた。

—————

「いやゝ難なく終わっいで！」

「んな訳ねえだろ！コウキのせいで俺が余計な使ちまったろうが！」

「だからって蹴ることねえだろよ。それに戦ってる時、結構ノリノリだったじゃん。」

「それはそれ、これはこれってやつだ。」

「ヒドくないか?!」

俺があの後、ゴーレムを倒したら魔法の罠も消えて俺がワープで、外に出て今は船の中だ。あのゴーレムが罠の元だったらしいが、結局は一石二鳥で終了だ。

後、何故俺達は船の中にいるのかというところの遺跡調査は、その奥にあるロストギアの調査とその回収だ。本当は楽に終わるはずがどっかの馬鹿のせいで時間が掛かったけどな。

それでロストギアは無事に回収し管理局に送り届けるところだ。

えっ、そんなもの持っていなかった？そりゃそうさ、別の人に預けてたからな。

「あ、ユーノさくん探しましたよ。」

「おっ、悪いな。この馬鹿のせいで迷惑掛けた上に、面倒に巻き込んでしまった。」

「いえいえ、私達もなかなか楽しかったですから、そんなに謝らなくても大丈夫です。」

そう、俺達は多人数来ていたのだ。

だが、罠のせいでトラブルになりその時に、ロストギアを渡し俺達は、囨になったのだ。

「てかその敬語やめないか？あんたの方が年上だぜ？」

「いえいえ、気にしないで下さい。後、この子をお返ししますね。」

『ユーノ、無事そうですね。』

「おっ、レイ♪お疲れさん。悪いなお前にまで、面倒事を押し付けて」

『気にしないで下さい。それにユーノが無事で良かったです。』

「そっか、ありがとな心配してくれて。」

今話しているのは、俺の相棒でデバイスのレイジングハートだ。長い名前だから俺は愛称でレイって読んでる。

レイを預けていたのは、無事に遺跡を脱出が出来るルートを組み込んでいたから彼女達に預けていた。

「いつ見てもお前らの愛は深いな。」

今まで黙っていたコウキが急に話した。

『コウキ、からかわないで下さい!』

どこか恥ずかしげにレイが反論した。

なんでだ?……そうか!

Saidコウキ

今までユーノにからかわれたので、レイジングハートを標的にしたのだが、ユーノが

「レイ!遠慮なんかすることは無い!俺はお前の事を愛しているぞ!!」

愛の告白を始めました。

『えっ!ちょ!ユ、ユ、ユーノ急にどうしたのですか!?』

ほら盛大にテンパってるぞ?まあ、俺も聞いたしさっき来た彼女なんて顔が真っ赤になってみてるしな。

「お前は自分が人ではないからと俺に遠慮しているのはわかる!だがそんなの関係ない、俺はお前という“存在”を愛しているんだ!」

ユーノお前色々とスゴいぞ。顔まで決め顔になっているが、あれは

気づいてないな。お前、軽く女落せるぞ？

『い、いいのですかユーノ？私があなを愛しても？』

「ああ！俺は全てを受け入れる！それが何者だろうと関係ない！俺は愛し続ける！！！！」

『ユーノ！！』

「レイ！」

ユーノがレイジングハートを抱きしめ【？】愛の劇場は終わった。

天然バカップルらか貴様らは！

見ろそのばいた少女がオーバーヒートして倒れているぞ！

ユーノ、時々お前がボケなのかツツコミなのかわからなくなるぞ。

—————

Saidユーノ

ハッハッハッ！盛大に恥ずかかった。

「そう言えば、回収したロストギアはどんな能力を持ってるんだ？」
コウキが俺に質問してきた。ちなみにそこにいた少女は、放心状態になったので退場しました。

「ああ、ジュエルシードって言って願えば、なんでも叶うらしいぞ？」

「へえー夢のようなアイテムだな。」

「なんだ、お前なら飛びついて欲しいって言うかと思ったのに。」

「自分の願い位自分で叶えるよ。」

たまにはいい事言うな。

「相手を落としたという充実感をノギヤあ！」

感動を返してくれホントマジで。

「ボディーブローはきついぞー。」

「うるさい。それに願い事をしない方がいい。」

「何でだよ？」

「その願いを歪んだ形にしてしまうんだ。」

「歪んだ形、例えば？」

「お前がモテたいといと願えば…」

「願えば何だよ？」

俺は心底嬉しい顔して告げた。

「ヤンデレハーレムの出来上がり♪」

「いーやーだー！」

…コウキってオモシロっ！↑どこのリングゴ死神だよ。

数時間後

「なあ、ユーノ？」

「何だ？」

「船、揺れてないか？」

「そうだ【ドオオオオン】！！」

これは爆発か！！マズいジュエルシールドに何かあったのか！？

「おい、レイ起きろ！」

『何でしょうか旦那様！』

「あれ！まだ起きてないのか！！」

レイはさっきのやり取りでスリープモードに入っていたがまだ完全ではないようだ。

「とりあえず行こうぜユーノ！」

「ああ！」

頼むから面倒な展開はよしてくれよ。

どうやらエンジン室が何者かの手によって爆破されたい。今はそれよりジュエルシードだ！

「着いた！」

俺達はジュエルシードが保管されている部屋にたどり着き入った。

「「『！！』」」

ジュエルシードが入っている箱を全身黒ずくめのヤツが持っている。やる。

「これは頂く…。」

声からして男か？だがそうはいくか！

俺は瞬時に相手の前に跳んだ。

「！！」

相手は驚き拳を上げた。だが俺はその腕を掴み、地面に着地しながらその腕を回し相手は宙に浮かんだ。そして俺はクルリと回り左足で蹴りを喰らわせた。

「グハッ！」

男はそのまま壁に叩きつけられジュエルシードもばらまかれた。

「アイツ素手でも強いんだな。」

『さすがユーノですね。』

コウキは感心しレイは当たり前前の事だという感じで言っていた。

「フッフッフッ。」

倒れている男は急に笑い出した。

「何が可笑しい？」

グラッ！

何だ船が揺れ出した！

『ユーノ！』

「何だレイ！」

『すぐそこまで、次元の嵐が近づいています！！』

「何！」

この展開の悪さまさか

「そう俺が全部起こさてた。」

黒男が話すと同時にヤツを囲むように穴が空いた。

マズいヤツの周りにはジュエルシードが！

「追えるものなら追いついて来い。」

そしてヤツは落ちて行きジュエルシードもある星にばらまかれるように落ちていた。

「クソっ！」

俺は穴に向かい走り出したが

「待てよユーノ！」

「どけコウキ！俺はジュエルシードを追う！」

コウキに阻まれた。

「お前わかってんのかよ、こんな次元のど真ん中に飛び込むつもりか？自殺行為だよ！？」

『その通りですユーノ！今回は無理です。』

二人とも本気で心配してくれてるだが

「無理だ。」

「何だよ！」

「俺はある星にジュエルシードが落ちていくのを見た！ほっとけるかよ！」

「そんなの管理局に任せれば…。」

「いや、あの組織がすぐに動くとは思えない。それにジュエルシードは一步間違えば、星が消えるかもしれないほど危険なんだ！」

「…どうしても行くのか？」

「ああ…。」

「なら俺も…。」

「駄目だ。」

「何だよ！俺も着いていた方が！」

ああ、確かに心強いよ。でもな

「あんたにはスクライア一族のみんなに俺が無事だという報告してほしいんだ。」

きっとみんなは俺の事を心配してくるはずだ。だから、連絡係が必要なのだ。

「…ユーノ約束しろよ。」

「“必ず帰って来い” だろ？」

「ああ…。」

そしてコウキは道をあげ、俺は進んだ。

「悪いけどレイ、付き合ってもらおうぞ。」

『わかりました。ですが無理は許しません！』

「善処する。」

そして俺は穴の前に立った。

「ユーノ本当に本当に無事でいろそして帰って来いよ！！」

コウキが力いっぱいに叫んだ。

俺は振り向かず右腕を横に出しサムズアップをした。

「行ってきます。」

そして俺は穴に飛び込んだ。

S a i d コウキ

「行ってこい、ユーノ・スクライア。帰ってきたら元気よく笑顔で、ただいまって言えよ？俺達はお前の事が好きなんだからな！！」
俺は聞こえるはずがないのに涙をほんのり流しながら叫んでいた。

やっと始まった物語（後書き）

反省会

「すごくいきなりすぎないか？」

「自分はこれが限界何です。」

「次回続くのかよけんな調子で？」

「頑張ってみます。」

「あっそ、そして次回タイトルは【旅行は計画的】だ。」

「だから勝手に決めるなプレッシャーかけんな！」

「良ければ読んでくれよな〜！」

「お前は話を聞くことを覚えろ！」

旅行は計画的（前書き）

奇跡的に連続で投稿できています。

旅行は計画的

毎度！憑依者ユーノです。

現在の俺の状況を説明します。

「次元の中で、右も左もわからいつまり迷子です！」

『カッコ悪いですよ、ユーノ。さっきまで、あんにに啖呵をきってきたのに。』

「やめてくれ。俺も気にしてるから…。」

そうあんなに前回格好良く決めたのに今はこのザマですハイ。

『普通、生身で次元の嵐に突っ込んでそれを破壊しますか？』

「いやだって降りたら目の前あったから邪魔だし、それに避けてたらコウキ達にあたるだろ？」

何事もなかったように淡々と話す俺だが、二話めですでに人外コースにはしっています。

『というか、さっきの次元の嵐を破壊したあの“剣”は何ですか？』

「ああ、あれは…」

ここで回想タ〜イム♪……すいません、真面目にやらせて頂きます。

回想

俺が降りたさきには、次元の嵐が近いてきていた。

「クソっ！もうここまで来たのか！！」

『どうするんですかユーノ！？』

どうする。俺はこのまま転移で避ける事が出来るが、上のコウキ達があぶねえ。

いや、それよりも！

「嵐程度が我^{オレ}の行く手を邪魔すんじゃないやねえよ！この自然災害如きがああああ！！」

：どこかの黄金王の真似をしてみました。

「来い！【乗離剣エア】！！」

そして俺はその黄金王の最強とされる宝具を取り出し魔力を流し込み、エアの刀身が回転を始める。

その剣から放たれる魔力と力は誰もが息を呑み、そして絶対なる恐怖を与えると云っても過言ではないほど「存在感」を出している。

ちなみに俺の魔力は無限です。修行をしたらそうなり、体の作りもサーヴァントよりも格段上になっているので、真名開放も問題ないのだ。

あえて言わせてもらおうとチート乙ですね。

やがてエアの柄の部分からなにかが放出し、回転速度も上がっている。

そして我^{オレ}は目の前の災害を睨みながら、真名開放を腕を振り絞り

「【天地乗離す】（エヌマ）：」

さらに回転を上げるエアを我^{オレ}は槍を投げるような勢いで

「【：開闢の星^{エリシユ}】！！！！」

その技を放った。

回想終了

「あの後は、大変だったな。あまりにも威力がデカ過ぎて俺まで、吹き飛ばされたからな。」

『全くユーノはスゴいのか馬鹿なのかわかりませんね。』
そして今になるわけだ。

さすがに自重しとくべきだと反省はしてます。

『それよりユーノ。』

こんな派手な事をして大丈夫何ですか？間違いなく管理局に目を付けられますよ？』

突然レイが質問してきた。何故かと言うとさっき放った一撃は、次元の嵐さえいとも簡単に消し去ったのだ。これは、間違いなくロストギアに判定されて没収だ。

だが俺に抜け目はない！

「何故なら俺は、乗離剣エアさえ完全に防ぐ結界を張っていたのだ！」

『えっ！あの一撃を防ぐ結界を張っていたのですか？！』

「可笑しいとは思わないかレイ？次元の嵐を破壊する一撃を放っているのに、次元の大被害はなかったろ？」

『！！』

気づいたか？

そう、次元の嵐を凌ぐほどの一撃ならば何かしらの次元の歪みが生まれるはずだか、それがどこにも現れていないのだ。

これは、完全に防ぎきた証拠だ。

…吹き飛ばされたのは、忘れて下さい。

『ユーノ？』

「何だレイ？」

『アナタハナニモノデスカ？』

「やめろ！考えねようにしてたんだんだぞー！てか何で片言なんだ

よ!!」

次元の真ん中で叫ぶユーノであった。

S i d eなのは

初めまして私は高町なのは9才の小学四年生です。突然ですが、私は最近変わった夢を見ます。

夢の中に決まって私が泣いているとある男の子が私に何かを言ってくれて励ましている夢。ただ、当たり前に見えるが私には不思議な夢だった。

「どうしたのよなのは？急に黙りこんじゃて？」

「何かあったのなのはちゃん？」

「!ううん。なんでもないよ。アリサちゃん、すずかちゃん。」

危ない危ない、今私は友達と一緒に帰っているとこだった。

「そう言えば、私最近変わった夢を見るねよね？」

突然アリサちゃんがそんな話題を出して来た。えっ？変わった夢？

「何か見た事がない男の子と私が仲良く遊んでる夢を見るねよ。」

あっ、私と内容が違うけど妙に‘男の子’のところに反応を示してしまう。

「でも、なんか嫌な気がしないのよね。不思議だわ。」

と何故か嬉しそうに話してる。

わ、私も話した方がいいよね？

「アリサちゃんもなの？」

すずかちゃんに先を越された。ううゝ。

「えっ？すずか、あんたも？」

「うん。内容は違うけど私の場合、一緒に本を読んで楽しそうにし

てる夢だよ。」

こちらは何故か嬉しそうに話している。

こ、ここで言わないと！

「二人とも私の話も聞いて！」

私も夢の内容について話した。

「三人が共通の夢を見るなんて不思議なこともあるのね？」

「確かに不思議なの。」

「もしかしたら正夢になるんじゃないかな？」

そんな話をしながら私達は歩いていると

キーーーーー

「「「！！」」」

突然聞いたことがない音が頭に流れ込んできた！

私だけじゃなくて二人も同じ反応してるの。

「今、変な音聞こえなかった？」

「うん。あそこの…」

「公園から聞こえてきたの！」

と私達は気になり走り出した！

…待つてー！二人とも速いよー！

ーーーーー

ピ、ピンチです！

何がピンチかと言うと

「グルルルル！」

黒い獣のが私達を睨んでいるからです！

公園に入った瞬間にこの獣が出てきたのだ。

「どうしようアリサちゃん?!」

「どうしようって言われてもわかんないわよ!」

「落ちてこうアリサちゃん、なのはちゃん!冷静にならないと」

「グルルアアアア!」

獣のが飛びかかってきた。

「「「きゃああああ!」」」

ここで終わりなの?

諦めていたら突然、横から

「デストローイー!」

ハニーブロンドの髪をなびらせながら、現れた男の子は獣にドロツ
プキックを喰らわせた。

「「「えっ!」」」

私達は啞然とした。

男の子は着地して獣に向かってこう言った。

「最初に言っておく！」

この雰囲気は決め台詞！二人とも何か期待してる様子なの。

「さっきの言葉は、言ってみただけだ！」

「「えっ！そっち！」」

そして、この出逢いが私達にとって壮絶（ある意味）な闘いの始まりだった。

S i d e ユーノ

アレっ！もう 終わりなのかよ！俺の話は！

『また次回ですね。』

マジかよ！

旅行は計画的（後書き）

反省会

「オイ！作者！」

「どうした？」

「なんか今回の俺の扱い悪くね！」

「日頃の行いのせいだろ？」

「ぐっ、てか最後あたりなんだよ？なんか嫌なフラグが立ってたぞ
！」

「……気にするな。」

「クソっ！次回タイトルは【原作キャラとの邂逅】だ！」

「ちよ、おま！そこから普通持つてくかよ！」

「また次回だ！オラァ！」

「やめろ。コンボはやめてくれええええ！」

原作キャラとの邂逅（前書き）

評価されているのが素直に嬉しいです。

正直、今回の話しは不安です。

原作キャラとの邂逅

どうも、前回中途半端に最後のあたりに登場した憑依者ユーノです。

現在俺はジェルシードに取り憑いている獣のを仕留めたところです。

後、御都合主義すぎるがそこにいた三人娘を助けました。

……別に狙ってませんからね！

あっ！俺がいつこの地球、‘海鳴’に來た説明をします。

プレイバックプレイバック！……毎度ながらすみません。それとネタが古いですね。

数時間前

「やっと地球が見えてきたぜ。」

『長い道のりでしたね。』

俺達はやっと地球の前まで、来ています。

『ユーノ。何故あなたは、宇宙空間の中で普通に話せるのですか？』

「ああ、体の表面に見えない盾を纏っているからだよ。」

『体自体に魔法を纏っているんですか！！』

確かに驚くよな。本来なら防御魔法は、自分の目の前にシールドを展開して発動する魔法なのだ。

だが俺が発動する魔法は、体に纏い呼吸代わりにもなっている。だが別に基本は使えない訳ではないが、俺が発動した魔法はまさに“

異例”である。

後、これ戦闘の時に装備して相手の事を攻撃したら、平和○静雄みたいに国土無双になります。

『それとユーノどうやって地球の海鳴という所に行くのですか？』

ちなみに場所はさっき調べ終わっている。

そして俺はニヤリと笑い

「このまま大気圏突破だああああ！」

地球に向かい大気圏に入りました。

『えっ、ちょ！無理ですよ！止まって下さい！』

「大丈夫だ！さっき言ったように盾纏ってるから！」

『どれだけ高性能なんですかその盾は！！』

言つとくがこれは俺のオリジナルの魔法だ。作るのに苦労したぜ、フツ！

「さあ！地球に向けてGOだ！貴重な体験だから覚えとくようにするか。」

『きゃああああ！よして下さい、ユウウウウノオオオ！！』

—————

「無事に到着したな。なかなか楽しかったぜ。」

『もう嫌です…。』

あの後、俺達は無事目的地に到着し今は公園にいる。

『到着した所が人気がない場所で助かりましたね。』
「ああ、幸い夜だったから良かったぜ。」

さてボチボチ探し始めますか。

考え事をしていて

キーーーーー

頭の中に音が響く、コレはジェルシードの反応だ！
それと同時に俺の第六感があるものを感じた！

『ユーノ！ジェルシードですか？！』

「ああ、後、別な何かを感じた！」

『何です、それは！』

それはな……………。

「女難が出た！」

『はあ！？』

「俺の第六感が告げているんだ！とんでもない女難が俺に降りかかるぞ！」

言っておきますが、これはふざけていません。実は、修行をしてる間に能力だけではなくその人達のスキルまで受け継いでしまったのだ！

しかも、修行の相手の殆どが女難を持っていたので、一気に俺に受け継がれた。

おかげで、俺の女運は相当（ある意味で）悪いのだ。

「クソっ！嫌な予感しかないぜ。」

『今はそれよりジェルシードです!』

「俺にとっては、結構重要なんだが、仕方ない行きますか!」

そして俺は、誰も入らないように結界をはり、現場に向かった。

着いて見れば何故か女の子が三人いた!

何故だ?俺は“特別な力”を持っていないとこの場所には居られない結界を張ったのに!

そして獣のが女の子達に襲いかかった!

チッ!考えるのは後だ今はジェルシードの封印だ!

そして俺は、獣に向かって走り出した!

――――

現在

「フウ〜間に合ったぜ。」

『なんとか成りましたね。』

と一段落していると

「ちょっとアンタ!さっきの黒いの何なのよ!」

金髪娘が俺に話し掛けてきた。

「駄目だよアリサちゃん。助けて貰ったんだからお礼言わないと。」

ヘアバンド娘が落ち着いてというような感じで止めに入り

「そうなのアリサちゃん。とりあえず落ち着こうよ。」

最後にサイドテール娘が出て来て同じように止めた。

すると突然…

「グルルルアアア!」

さっきの蹴り飛ばした獣が起き上がった。……封印するの忘れてました。

三人娘はびっくりして俺の後ろにしがみつくように隠れた。

「ああ、気にすんな今なんとかするから。」

「どうやってよ!」

「こうやってだよ!」

俺は右手を前に出し

「チェーンバインド!」

俺の手の平から翡翠色の鎖が放たれた。

これは俺の得意な拘束魔法だ。極めれば、天の鎖並みにもできます。

「グウ!」

「捕まえたの!」

「ジェルシード封印!」

「グアアア!」

光に包まれやがてさっきの黒い獣は消えて碧の宝石だけがその場に残っていた。

「すごい…。」

はあーやっと終わったぜ。

「……………」

「そろそろ離してくんない?」

俺はいまだにしがみついている三人娘に言った。

「「!」!」

一斉に離しだした。
オマケに顔赤らめてるし、……何でだ？

「それより、アンタは何者なのよ！もう訳がわかんないわよ！」

「私も出来れば教えて欲しいな？」

「私もなの。詳しい事を教えて欲しいの！」

女難が見事に当たった瞬間でした。

「ふうんなるほどそのジェルシードを追う為にわざわざ長い旅をしてきたのね？」

結局ばれてすべて話してる所だ。目の前であんなことがあったので、隠し気れない。

意外に三人とも俺の話しを信じてくれた。

「ああ、本当に長い道のりだったぜ。」

「そのジェルシードって何個あるの？」

「全部で21個だ。」

「集めるのがとっても大変だね？」

「まあ、頑張るよ。その為に来たんだからな。」

自然に会話をしている俺達であった。

「そだ、自己紹介がまだだな、俺はユーノ・スクライアだ。気軽にユーノって呼んでくれ。」

「あっ、私は高町なのはです。なのはって呼んでいいよ。私は君の事ユーノ君って呼ぶね？」

「ああ、いいぜ！よろしくな、なのは！」

「うん♪」

どこか嬉しそうに顔を赤らめて挨拶をしている。

「次に私だね。私は月村すずかです。私も出来れば、すずかって呼んで欲しいな？後、私もユーノ君って呼ぶね？」

「おう！よろしくなすずか！」

「うん、よろしくねユーノ君♪」

小学生とは思えない、大人な微笑みを返してくれた。こちらまほんのり顔を赤らめている。

「最後は私ね。私はアリサ・バニングスよ。アンタは私をアリサって呼びなさい？私はユーノって呼ぶから！」

「へえ！強気な女は嫌いじゃないぜ、アリサ？」

「！なな何言ってるのよアンタは！」

顔を真っ赤にして怒っているが、嫌そうではないようだ。

ちよつとからかいすぎたか？反省しておくか。

「ユーノ君、首にあるそのネックレスは何なの？」
「なのは質問してきた。」

「そうだ、まだコイツの紹介がまだだったな。レイ、喋っていいぞ？」
「？」

『わかりました。ユーノ。』

「うわっ！急に喋ったわよ！？」

「すごい！どんな仕組みになってるの！？」

アリサは驚き、すずかは興味深々だ。

…すずか、改造しないでくれよ？

『改めまして私は、レイジングハートです。よろしくお願いします。』

レイが挨拶すると三人ともまた挨拶をした。

「……………」

『今日は、どこで寝るのですか？』

あっ！そうだ。急に來たから泊まるところがねえよ！

「どうすっかな？」

考え事していると

「あっ、あのユーノ君！」

なのはが緊張しながら俺に聞いてきた。

「どした？」

「私の家に泊まらない？」

「えっ！」

「ほっ、ほら！今日のお礼したいし、ユーノ君ともっとお話し、したいから（ううゝ恥ずかしいよ。でも、ユーノ君ともっと一緒に居たいからって、無理言い過ぎたかな？）」

顔を真っ赤にして心の中で色々と考えている。

「あの、なの」「ちよつと待（ちなきってね）！！」「うおっ！」

俺はなのはに答えを言おうとしたら突然、二人が話しに入ってきた。

後、俺はなのはの話しを断ろうとしていた。家族に迷惑かかるだろうし、何より女難が…。

「ユーノは私の家で泊まるのよ！今日の事で色々聞きたいし、私を

からかった責任はとって貰うからね!!（うわゝ恥ずかしい事言っちゃた。べっ別に深い意味はないんだからね! ユーノが私の事をか
らかうから仕返し、したいだけなんだからね!）」
顔を真っ赤にして心にいい聞かせるアリサであった。

「私もユーノ君にはうちに泊まって欲しいな? 今日の事もそうだけ
どレイシングハートについても知りたいし、何よりユーノ君の事を
知りたいからね?（何で私、こんなに積極的にしかも大胆こと言っ
ちやたんだろ? でも、やっぱりユーノ君にはウチに来て欲しいなゝ
）」

自分の変化に驚きながらも、目的を忘れないすずかであった。

え、何この状況? 俺は断ろうとしたのに、なんかお泊まりが決定み
たいな感じた。

「「「ユーノ（君）（君）!!」」」

「はいっ!」

突然呼ばれ思わず、声を上げてしまった。

「「「とっちがいいのか（決めてよ）（決めなさい）（決めてね）
!!」」」

本当に俺にどうしろってんだよこの状況は、よおおお!

心の中で叫ぶユーノであった。

『女難…大当たりでしたねユーノ。』

原作キャラとの邂逅（後書き）

反省会

「さくくしゃちゃくん、遊・び・ま・しょー！」

ーうおっ！ 標識持ってきてどうした！？

「何なんだ、今回の話しは！ 完全にフラグっぽいものを立ててたぞ
！！」

ー良いではないか。あんな美少女に囲まれてんだから？

「そう言う問題かよ！ 次回タイトルは【どうすんだよ俺！】だ！」
ー毎度ながら無理やりすぎないか！

「ウルセェ！ 死ね！」

ーうわっ！ 振り回すな！ 投げつけんなー！ ぎいやあああああ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2841z/>

憑依者ユーノの物語

2011年12月13日00時53分発行